羽陽学園短期大学紀要　第12巻　第２号（通巻44号）2024年２月
Bull. of Uyo Gakuen College, Vol.12, No.2, February 2024

保育者が気になる子どもの行動についての考察

－特別支援授業改善をめざすためのアンケート結果から－

渡　辺　　聡　幼児教育科

（2023年９月29日受理）

〔　要　　約　〕

本研究は、保育者を目指す学生に行われる、特別支援授業の改善を目的として行われた。調査対象は、特別支援関連授業の受講を開始した短期大学生（以降、学生と表記）、および現場の保育者である。学生が抱いている保育に関わる不安と保育者の抱いている気になる子の様相を調査・比較した。その結果をもとに、大学の授業で焦点を当てるべき内容を見極め、授業改善に活用する。学生への調査の結果、学生の抱く不安内容は、個と集団の関係に意識が及んでいた。また、学生は、保育者が抱く個と集団の関係についての問題にも、意識をもっている回答が得られた。保育者への調査では、事例を基に保育者が気になる子どもの様子に重み付けを行った。その結果と学生との意識を比較した。調査の結果保育者は、子どもが示す行動特性と個と集団の関わりで発生する問題を上位に選択した。したがって、学生の不安意識と保育者の気になる子への注目意識の類似性が見て取れた。今後は、さらに事例やサンプル数を広げたり、アンケートの精度を高めたりする必要が感じられた。

Ⅰ．はじめに

本学において特別支援関連授業は、幼稚園教諭や保育園保育士、保育教諭、または介護士（この後、保育者と記入）を目指す学生にとって必修の授業である。したがって本学の特別支援関連の授業は、「特別支援教育入門」として、２年次後期に開講している。

一方、本学のカリキュラムでは、２年次の前期までに様々な実習（幼稚園教育実習・保育実習保育所・保育実習施設・介護実習等）が行われる。学生は、期間の長短は別にしても、実習の中で保育者として必要な知識や技能を学ぶ。更に後期になっても、実習が行われ、現場での学びが展開される。学生は実習で、現場でしか体験できない問題を肌で感じ、学生自身の保育に関する認識を広げていくことになる。

学生が実習現場で直面する問題の一つとして、特別支援に関連する問題がある。この問題に関して文部科学省は、幼稚園教育要領（文部科学省，2017）において、時代と共に変化する状況を捉え、特に配慮すべき事項として以下のように述べている。「(2) 障害のある幼児の指導に当たっては，集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことに配慮し，特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ，例えば指導についての計画又は家庭や医療，福祉などの業務を行う関係機関と連携した支援のための計画を個別に作成することなどにより，個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的，組織的に行うこと」[1]（下線は、筆者が加筆）。子どもの指導・保育に関しては、現在、インクルーシブな対応が求められているのは周知の事実である。その子一人一人のもっている特性に配慮し、障害のあるなしに関わらず、一緒に集団の中で指導・保育していくことが、求められているのである。

守（2016）は、幼稚園における気になる子への新任教師の援助について調べ、その指導や保育の特性について報告している[2]。その中で、新任教諭が気になる子どもの動きは、「気になる子の集団に与える影響の大きい行動」であると述べている。新任教師は、子どもが集団全体の動きと何らかの違和感がある動きをするとき、それが気になる行動と感じるのである。幼稚園教育要領にある「集団の中で生活することを通して」という配慮点は、重要なことである。しかし、新任教師にとって、子どもが集団の中で特異な言動を繰り返す場合、対応が難しいことが予想される。また、「幼稚園の新任教師は、気になる子への直接的対応に焦点化し、周囲の環境調整にまで対応が至らないと予想される。」と述べている。このことも、新任教師の関わりの実態を表わしている。さらに、矢野ら（2021）は、学生の保育実習に対する不安について検討している[3]。その中で明らかになったことは、「保育現場では『気になる子ども』に出会う可能性が高い

こと」、「事例を通じた具体的支援法を考えていく授業の在り方は効果が高いこと」を挙げている。

それでは、一体どの様な具体的内容を特別支援関連の授業に取り上げていけば、学生のニーズに対応した授業になるのであろうか。

本研究は、特別に支援を要する子どもや気になる言動をする子どもの様子を、学生と保育者に対するアンケート調査から考えていく。

特別支援関連の授業を活性化するために、学生と保育者の意識調査から迫る。対象は、これから特別支援関連の授業をうける学生と現場の保育者である。

学生へのアンケート調査は、保育者を目指しているが、まだ知識や経験の少ない学生の意識を尋ねるものとする。学生へのアンケート調査では、気になる子への対応を意識して、不安感の有無を問うている。学生は、幾度かの実習を経験しているとはいえ、特別に支援が必要な子、気になる子への対応を主体的に行った経験は多くない。その時の赤裸々な気持ちを対応への不安から引き出し、研究目的に迫ることにした。

一方、保育者に実施したアンケート調査では、予想される具体的項目を例示し、その頻度について分析する。アンケート結果をもとに、どんな内容が現場保育者の配慮を要する内容なのか分析する。

また、学生の不安意識と保育者の抱いている気になる子の様相を比較する。学生と保育者の回答を比較の中から、授業で重点的に取り上げる内容を考えていく。

Ⅱ．研究の方法

１．調査の実施対象者

・令和５年度、羽陽学園短期大学後期に開講される授業「特別支援教育入門」を受講予定の学生82名
・天童市内幼稚園教諭８名
・札幌市内認定こども園保育士20名
・札幌市内認定こども園保育教諭26名

ただし、アンケート用紙を提出した学生は、アンケート実施日に授業参加し、提出に同意したものを採用した。アンケートの同意の有無は、アンケート用紙の提出で判断することを説明し、倫理的配慮とした。

各施設の保育者に対しては、アンケート調査を施設長に依頼した。アンケートは、記入者である個々の保育者から提出があったことで、倫理的要件を満たしていると考えた。各施設長への依頼文には、アンケート調査の目的と活用趣旨および留意点が明記され、所属職員に周知されている。

２．調査の実施日

①学生への調査の実施日
・2023年８月25日（金）１限目～２限目

「特別支援教育入門」の授業内に、時間を設定し趣旨説明後、アンケートに記入してもらう。当日の授業登録者は、82名。そのうち提出があった者は、72名であった。当日の未提出者のうち１名が、別の日に提出があり、合計で73名となった。

②現場の保育者への調査の実施日
・2023年８月下旬～９月上旬頃

アンケート調査は、依頼を許諾した施設長に実施と取りまとめをお願いした。また、アンケート用紙の回収は、特に遠隔地の保育施設に対して、郵送や電子媒体を活用した。実施と取りまとめについては、各施設長に依頼し協力を得た。

３．調査の内容

アンケート調査は、「特別支援教育入門」の授業を受講した学生に対するものと現場の保育者に対するものの２種類を実施した。以下にその内容について掲載する。

①学生へのアンケート調査

本学において「特別支援教育入門」の授業は、１日に２コマ行われる。授業参加学生を２クラスに分け、同じ授業内容を展開する。アンケートは、記入に約15分前後を要した。

設問の内容は、４つである。本調査では学生に、特別に支援を要する子や様子が気になる子の保育者となる前提で、気持ちを尋ねることとした。それは表出内容が、学生にとって身に付けたいと考える能力や資質、または技能に繋がると考えたからである。また、講義や演習において実際に学びたい内容にも繋がると考えた。

実際に配付したアンケート内容を表１に呈示する。

設問は、特別に支援を要する子ども、または様子が気になる子どもの保育について、保育者としての自信を尋ねた。質問には「不安」という文言を使用し、気持ちを表出し易いように配慮した。回答は、「不安がある」、「不安がない」、「どちらでもない」の三択で記入する。学生は、設問②にその回答に関連して、何故その選択肢を選んだのか、その気持ちを自由記述する。

設問③では、最初の質問で「不安がある」を選択した学生に特化した設問を配した。「不安がある」を選択した学生は、前の設問で「不安がある」を選択した気持ちを記入している。この設問内容は、回答が重複する可能性もある。しかしここでは、今までの体験を踏まえ、学生が印象に残っている不安の根本（より詳

表１　学生配付アンケート内容

皆さんはこれから、実習や保育・介護の現場で、「特別に支援を要する子」、または、様子が「気になる子」に接することが多々あると思います。
私は、皆さんがこの授業を通して、特別な支援に関する能力やスキルが、今まで以上に向上できることを願っております。そのための資料として、以下の内容に記入して下さい。結果は、本授業や研究実践や論文等で活用していきます。
①　実習や保育の現場で、「特別に支援を要する子ども」または、様子が「気になる子」が在籍した場合の気持ちや対応について伺います。どれかに○を付けて下さい。
（　　）不安がある　（　　）不安はない　（　　）どちらでもない
②　どうしてそう感じるのですか？

③　「不安がある」人に伺います。その不安の内容は、具体的にはどんなことでしょうか？

④　「特別な支援」や様子が「気になる子」について、現場の保育士が直面している状況や困っていることにどんなことがあるか、知っていたらその内容を記入して下さい。

しい内容）が、表記されることを期待した。また、最初の設問では、個人差はあるが、一般的に「不安がある」を選択する学生は多いと予測する。多くの学生が不安に感じる要因をまとめ、授業に取り上げていくことは、学生が授業で学びたい事柄に対応している。

設問④の質問は、現場保育者の困りの意識に関する設問である。学生は、実習や自分の過去の体験を通して、保育者が多くの問題に対応する様子を、見聞きしているはずである。この設問は、保育者が抱いている困りの様子を、学生が認識している程度や内容を明らかにするために設定した。また、自分事としてどの程度まで考えているかを明らかにすることにも繋がると考えた。

②保育者に対するアンケート調査

今回のアンケート調査で協力を頂いたのは３つの保育施設である。運営形態は３園とも異なっている。幼稚園・認可保育園、そして認定こども園である。アンケート調査は、異なった３種類の園の保育者を対象に実施された。これにより、園種による傾向を和らげることが出来ると考えた。

アンケートは、『「気になる子」についてのアンケート』というタイトルで行っている（表２）。しかし、特別に支援を要する子という意味も含まれることを、設問から読み取れるようにしてある。

設問Ｑ１と設問Ｑ２は、保育者が担当している子どもの年齢と保育者の経験年齢を尋ねている。この設問は、現在の担当児の年齢や勤続年数のバランスを確認するために行った。それらの要因による回答者の記述内容に、偏りが無いように考慮した。

設問Ｑ３は、新任の保育者や何らかの理由で気になる子を担当しなかった保育者以外は、「ある」を回答する予想で配した設問である。この設問から続けて設問Ｑ４の内容を尋ねることにより、細かな記入を促せると考えた。この記述内容を調査することにより、現場での困りの様相と大学の授業で焦点を当てるべき内容を整理していく。また、抽出される内容と学生の回答を比較検討することも可能である。

Ｑ５は、様子が気になる子どもが表わす状況を挙げている。保育者が気になる子どもの事例は、様々にある。アンケートには、これまで筆者自身も多くの保育者との面談で、対応が難しいと考える事例を、文言を整理して採用してある。指導や保育に困難さを抱える保育者をサポートするために、現在様々な参考となる資料が出されている。その中には、多くの事例と対処法が掲載されている。本研究では、気になる子の事例を列挙して説明している資料を参考にしている。そして、一般によくみられる症状を取り上げることとした[4),5),6),7)]。

Ｑ６は、保育者の切実な困りの感情を問うたものである。保育者にとって、担当する子どもが、生活に適応できていないと感じることは辛いことである。それは、保育者自身はもちろんのこと、保護者や周りの関係するもの全てにとって辛い内容である。また、何より辛いのは、子ども自身であることも保育者は痛いほど感じている。だから辛い困りの感情を生起させている内容について、対応法を考えるきっかけとなる質問として設定した。

Ⅲ．結果と考察

各アンケートの回答結果について考察する。

１．学生へのアンケート調査

１－１．不安意識について

調査対象は、本学２年次の学生である。アンケート

表２　保育者配付アンケート

「気になる子」についてのアンケート

Ｑ１．現在の主担当園児は何歳児ですか？　○を付けて下さい。
【　０～２歳児　　３歳児（年少）　４歳児（年中）　５歳児（年長）　その他　】
Ｑ２．勤務年数（通算）　【　　年目】
Ｑ３．先生は、現在または今までに、「気になる子」または、「特別に支援を要する子」を担当または、関わりをもったことがありますか？ ○を付けて下さい。　（　ある　ない　）
Ｑ４．「ある」に○を付けた先生に伺います。
その子のどんなところが気になりましたか？または、支援を要する所でしたか？ 指導や保育に苦労した部分がありましたら、内容や試みたこと・結果等もご記入下さい。
Ｑ５．次に、様々な「気になる子」どもの状況を例示します。現在の指導・保育現場の様子や必要感から、授業や演習で取り上げたり、シュミレーションしておいたりした方が良いと思うことを、教えて下さい。カテゴリーごとに（　　）に１～６の順番をつけて下さい。

カテゴリーＡ〈個人行動面〉
ａ（　　）集中力が続かなく、興味を無くすとその場からいなくなる。
ｂ（　　）好きなことに集中すると、行動の切り替えができなく固執する。
ｃ（　　）何度も同じ質問をする。
ｄ（　　）１日のスケジュールが変わると、混乱してパニックになる。
ｅ（　　）性器をいじっている。
ｆ（　　）整列ができない。じっとしていない。

カテゴリーＢ〈身体特性面〉
ａ（　　）よくものを落としたり、こぼしたりする。
ｂ（　　）リズムとび、スキップができない。
ｃ（　　）姿勢が悪く、いつもだらーっとしている。
ｄ（　　）体を良くぶつけたり、ケガが多い。
ｅ（　　）おもらしをする。
ｆ（　　）ひとりでくるくるまわったり、反復行動をしたりを繰り返す。

カテゴリーＣ〈人間関係面〉
ａ（　　）おもちゃの貸し借りができない、トラブルになる。
ｂ（　　）特定の友達としか遊べない。
ｃ（　　）列・順番を守ることができない。
ｄ（　　）ルールを決めても理解できず、よくトラブルになる。
ｅ（　　）一人遊びが主で、友達と遊ぶことをしない。
ｆ（　　）友達の嫌がることを繰り返したり、しつこくしたりする。

カテゴリーＤ〈基本的生活面〉
ａ（　　）手足の汚れを気にする。
ｂ（　　）自分の思いで行動し、他のことが目に入らない。
ｃ（　　）制作物・作品を完成できず、いつも途中半端で終わる。
ｄ（　　）保育者が代るとパニックになる。
ｅ（　　）発表会等練習や本番の活動に参加しない・消極的である。
ｆ（　　）身支度に、極端に時間がかかってしまう。

カテゴリーＥ〈言葉や会話面〉
ａ（　　）話す声の大きさ調整（大きい・小さい）ができない。
ｂ（　　）質問の答えがなく、全く違う内容のことを答える。
ｃ（　　）オウム返しや繰り返しが多い。
ｄ（　　）相手に構わず、自分のことを一人で話続ける。
ｅ（　　）緘黙・部分緘黙がみられる。
ｆ（　　）相手に構わず、汚い言葉を使ったり、時には暴言をはいたりする。
Ｑ６．上記５つのカテゴリーは、どれも大事なものですが、現場の困りの意識から考えて、敢えて順番を付けるとしたらどの様になりますか？ 番号を付けて下さい。
・（　　）カテゴリーＡ〈個人行動面〉
・（　　）カテゴリーＢ〈身体特性面〉
・（　　）カテゴリーＣ〈人間関係面〉
・（　　）カテゴリーＤ〈基本的生活面〉
・（　　）カテゴリーＥ〈言葉や会話面〉

表３　対応への不安

不安な気持ち	人数
〈１〉ある	54
〈２〉ない	7
〈３〉どちらでもない	12
提出者合計	73

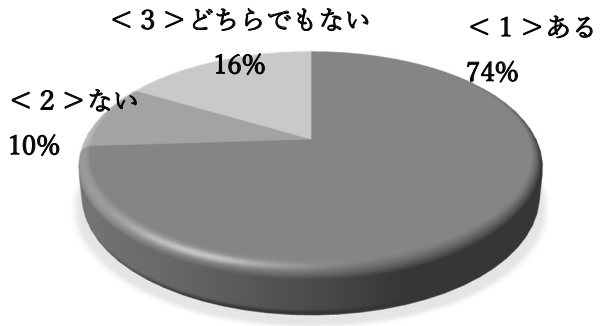

図１　対応の不安（割合）

表４　気になる子の対応に関する学生の気持ち

「不安あり」について　（件）	
a 知識が乏しい・対応方法が分からない	43
b 関わった経験が少ない・ない	6
c その他	5
「不安なし」について　（件）	
a 何らかの対処法を知っている	4
b 対応経験がある	3
c 未記入	0
「どちらでもない」について　（件）	
a 保育者同士の協働があれば	3
b 今までできた	1
c 方法を試しながら	1
d それなりにできる	1
e 支援が必要な子がいるのが当たり前	1
f 個性として捉えれば特別に扱わない	1
g 知っている＋できるだろうかの半々	1
h その場にならないとわからない	1
i 未記入	2

調査実施日は、１週間後に２回目の保育園実習を控えている状態であった。設問①のアンケート結果を表３および図１に示す。表３は人数、図１はその割合を表している。

提出者は73名。実習前であるという状況でもあり、何らかの不安を抱いている学生が74％で、約４分の３であった。多くの学生が「不安がある」を選択している。この設問は、単純に「不安がある」、「不安がない」、「どちらでもない」の３者択一で、選択肢のどれかを選んでもらっている。学生は、今までの体験や過去において経験した実習での印象を手がかりにして、自分の気持ちに近い選択肢を選んでいる。実習前という学生の心理状況からみて、この結果は納得出来る回答である。また、残りの約４分の１の学生は、「不安がない」や「どちらでもない」の選択肢を選んでいる。「不安がある」を選んだ学生の選択理由、他の選択肢を選んだ学生の選択理由の違いをみるために、設問②の内容を考察する。

１－２．選択理由について

設問②では、設問①の選択理由を尋ねている。選択した気持ちを自由記述してもらった内容は、以下の通りである。

学生アンケートの設問②「不安がある」の回答は、74％である（図１）。「ａ知識が乏しい・対応方法が分からない」という学生にとって、自分の今までの体験や実習での経験から考え、対応に苦慮すると感じている部分である。また「不安あり」の「ｂ関わった経験が少ない・ない」を含めると、学生は知識や経験不足から不安を抱いていることが分かる。さらに、「不安あり」の「ｃその他」の記述内容は、知識や経験から抱く不安に類するものであった。例えば、全体と個の指導・保育の兼ね合いなどに関する記述などである。「不安あり」の回答結果は、「不案なし」と回答したものと「どちらでもない」の割合よりも大きな差がある。

この結果を受けて、「不安がある」学生が、具体的にどの様な不安があるかを尋ねたのが、設問③である。分類は、学生の記述内容の頻度によって行った。その結果、表５に示したように、ａからｇまで、７つの分類をすることとなった。

記入件数が多いａ・ｂ・ｃは、学生の子どもたちに対する指導への不安を如実に表している。記入内容は、多岐にわたり、偏りはみられない。ａおよびｂに関する記述は、障害の知識と子ども理解の程度を基に記入されていた。自分の自信のなさから、どのように指導すれば良いか、対応の正しさ、支援の仕方について不安をもっている学生が多い。不安の内容は多岐にわたる。

その中でｃは、クラスの他の子どもとの関係性を念

表５　「不安あり」具体的内容（一人で複数内容の記入可）

不安の具体例（一人で複数内容の記入可）	（件）
a 知識が乏しい・正しい対応が分からない（知識・指導の妥当性・指導不成立状況）	19
b 援助・支援のし方の程度や加減が分からない（関わり方・声かけ等）	17
c 教室等の同一空間における、対象児と他の子どもへの指導・対応（関係性）	15
d 個人差を主にした、対応の仕方が複雑（含：劣等感にならない支援法）	9
e 保護者との情報共有・相談対応	5
f 支援を要する子への心情・行動理解と継続的な注視	3
g その他（見守り方・いじめ）	2
合　　計	70

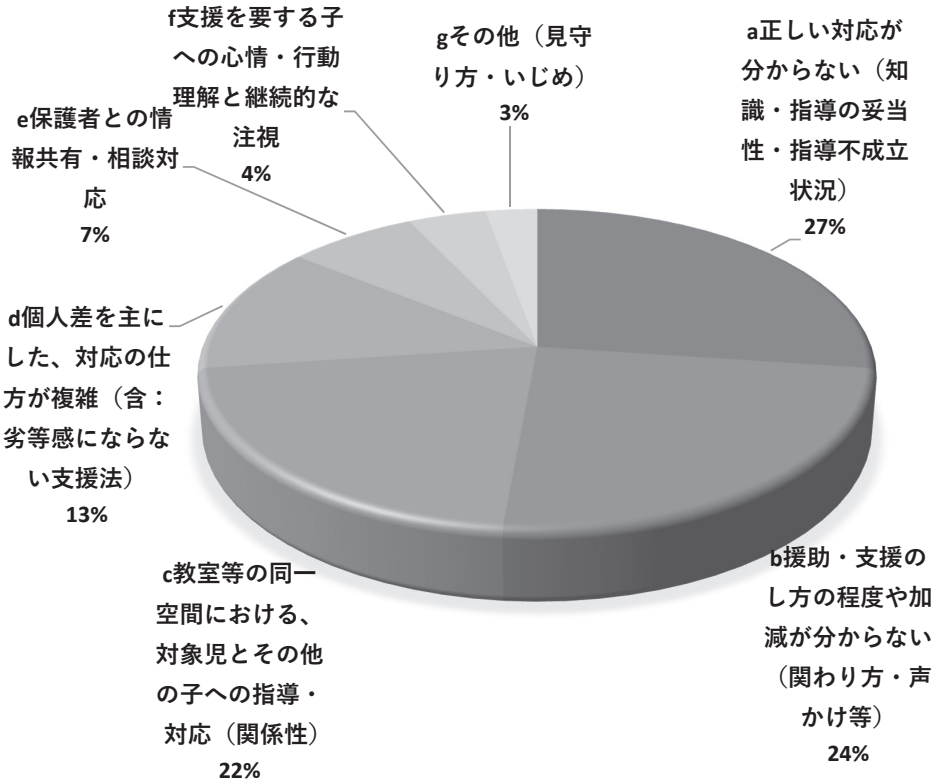

図２　「不安あり」具体的内容（割合）

頭に置いた不安である。保育者が予定している日々の保育プログラムは、集団として指導・保育を行う場合、気になる子どもの言動に左右されることが多い。個と集団の関係性の問題がそこに発生する。子どもと関わった経験の少ない学生にとって、クラス全体のプログラムを遂行し、気になる子どもに対応することは、難しい。図２は、表５の割合をグラフ化してある。図２をみると、集団と個の関係を明確に記述しているｃは、22％であった。集団を意識した個人差の対応が困難であると記述している、ｃとｄを合わせると35％になる。「不安がある」と答えた学生の約３分の１が、個人とクラス集団の関係を意識して回答している結果となった。

１－３.「不安あり」の具体的内容

次に学生に、保育現場で保育者が直面している問題について尋ねることとした。設問④は学生が、特別な支援や気になる子への保育実態について、どの様な認識があるかを尋ねたものである。またこの設問は、現場の保育者に行ったアンケート調査と比較検討する目

表６　保育者への困りに対する理解（一人で複数内容の記入可）

現場の困り具体例（一人で複数内容の記入可）	（件）
a 日々の定型的な対応（信頼構築・要求対応・言葉かけ等）	15
b 対象児への保育士の張り付き支援による負担感	10
c 非定型な行動への対応（声かけ・関わり方・クールダウン・多動・暴力）	7
d 対象児外の他の子どもからの理解・関係	6
e 対象児外の保護者からの理解・関係	5
f 研修による対象児理解・対応策の探求	5
g 医療的ケアに精通した保育士の不足	2
h 記録等の蓄積による活用の様子と負担感	1
i 記入無し	30
合　　計	81

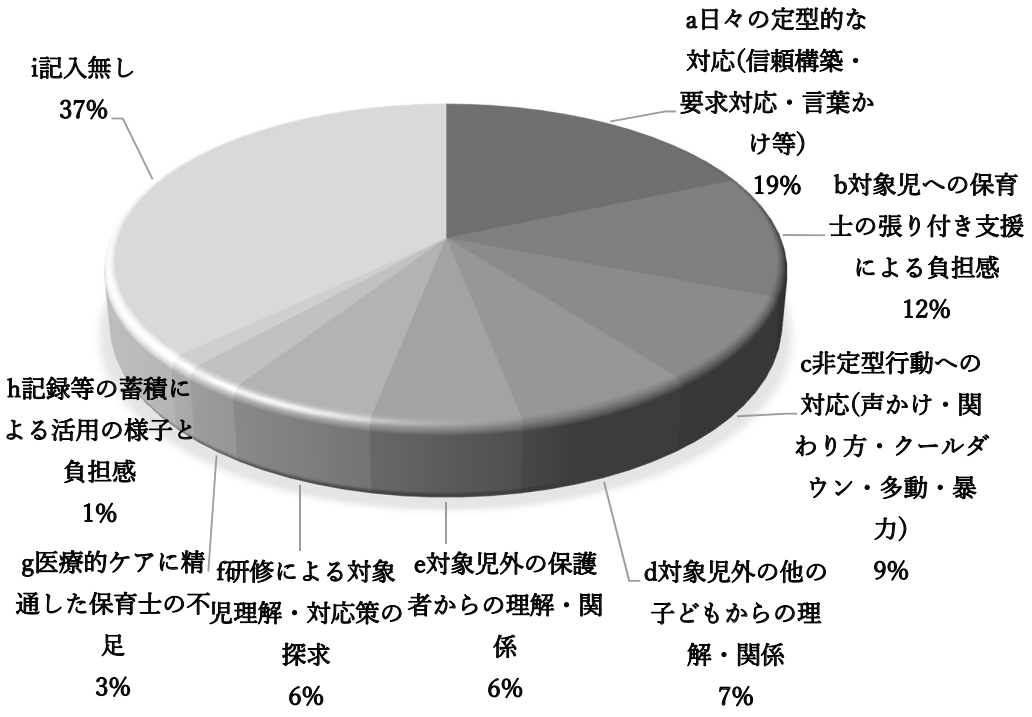

図３　現場保育士の困りへの理解（割合）

的でも行っている。学生の記入内容をまとめたものを、表６と図３に呈示している。

設問④は、しいて学生に現場の保育者の状況について、認知度や理解度を尋ねた。

学生の知識や体験からアンケートに記入したものをみると、表６のｉ「記入無し」が30件あり、図３での割合は全体の37％になる。記入欄に複数の分類項目に該当するものを、全てカウントした結果、合計51件の記入があった。約３分の１の割合で現場保育者の状況に理解が不十分であった。しかし、逆を言うと提出内容の全体の約３分の２にあたる状況が記入されている。学生の保育現場に対する関心や今までの学びの様子が反映されていることになる。

記入内容をみてみると学生は、気になる子に対する保育者の配慮について、実習体験や自らの学びを通して知っていることが分かる。ａの毎日のルーティンに対する支援の実態、ｂの対象児への保育に関する人的保障などに、保育者が困っていると回答している割合が多い。一方、ｃの子どもの突発的な行動に対する対応やｄの他の子どもとの関係などを回答している割合

はそれほど多くはない。ｅの保護者との対応も同様である。

学生は、現場での体験は多くはないと予想される。しかし、ｂやｃの内容も個と集団の関わりと考えると、学生が認識している保育者の困りの状況は、現場の状況をある程度捉えているものと考える。

２．保育者へのアンケート調査

２－１．現在の担当および経験年数

調査対象は、本アンケート調査に協力頂いた３つの保育施設である。回答者は、それぞれの施設の保育者である。

各施設は、保育施設であるがその運営形態は異なっており、幼稚園、認定こども園となっている。３園の子どもへの関わり方については、どの園も預かり保育等、幼稚園または保育園の機能を含んだ運営をしているので、似ているところがある。しかし、アンケートの設問Ｑ１では、園の特性も踏まえ、現在の担当児や保育者の経験年数を尋ねた。内訳を表７に表わす。担当児年齢の分布は、０～２歳児区分を複数年齢児と考えると、回答者数のバランスは良い。

次に設問Ｑ２では、保育者の勤続年数について尋ねた。経験年数の状況を調べるためである。結果を表８に示す。

保育者の経験年数は、表８が示すとおり１年目から10年目までが多かった。経験年数が10年迄の比較的若い保育者が、全体の過半数を超えていることとなった。

２－２．気になる子の担当経験

アンケートの設問Ｑ３では、気になる子の担当経験の有無を尋ねた。結果は概ね予想できるが、回答を求めることにより、アンケートの趣旨の理解と体験を想起する導入とした。結果を、表９に呈示する。

回答結果は、予想に違わず、「担当がない」と記入したのは５名の保育者であった。この５名は、０～２歳児を担当する保育者であり、３名は経験年数が１～５年であった。また、残りの１名は経験年数が15年で、もう１名は無記名の保育者であった。したがって、「担当がない」保育者は、１名を除き保育経験の浅い保育者と考えられる。若年層が主であり、例外として何らかの特別な理由があった保育者と考えられる。

次に、具体的にどの様な事例があるか設問Ｑ４で尋ねた。その結果をまとめたのが表10である。

２－３．具体的な事例の分類と内容

保育者が気になる子どもの状況と指導や保育に苦労した事例を、表10に示す。アンケート解答用紙に複数の記入があるものについては、重複してそのままの件数でカウントしている。

施設Ａ、施設Ｂ、施設Ｃにおいて保育者の回答事例には、ｄ・ｅ・ｆ・ｇ・ｈのような、個と集団の在り方に大きく関係する対応事例がある。これら５種類の事例を合計すると34例となり、対応事例全体の約38％となる。さらに回答ａの「思い通りにならないとかんしゃくを起こす・暴れる・叩く・パニック」という、保育者のケアが必要で集団に大きく影響を与える行動を合わせると、対応例の約半分以上がこの内容を挙げている。これを学生の認識と照らし合わせてみてみた

表７　保育者の担当児年齢（現在）

担当児年齢	施設Ａ	施設Ｂ	施設Ｃ	合計
０～２歳児	1	11	13	25
３歳児（年少）	2	3	3	8
４歳児（年中）	2	4	3	9
５歳児（年長）	2	1	4	7
その他	1	1	3	5
合計	8	20	26	54

表８　保育者の経験年数

経験年数	施設Ａ	施設Ｂ	施設Ｃ	合計
１～５年	3	8	13	24
６～10年	1	5	4	10
11～15年	1	1	2	4
16～20年	1	2	1	4
21～25年	1	0	4	5
26～30年	1	2	0	3
30年～	0	0	2	2
無回答	0	2	0	2
合計	8	20	26	54

表９　気になる子の担当経験の有無

有無	施設Ａ	施設Ｂ	施設Ｃ	合計
担当がある	8	18	23	49
担当がない	0	2	3	5
無回答	0	0	0	0
合計	8	20	26	54

い。保育者の困りに対する学生の理解（図３）は、個と集団の関係に及ぶ記述を合わせると、約半数である。明確に個と集団の関係性を記入していたのは、全体の22％だけであったが、学生の不安の意識と保育者の思いの相違は大きくはない。したがって、大学の授業の重要なテーマとして、現場の実情を取り上げ、事前の学びを深め、学生の不安感を少なくすることは重要である。

２－４．事例を基にしたテーマの検討

保育者には、学生が授業で学びを深めるため、事例を呈示しその必要度を評価してもらった。参考となる事例は、久保山ら[5]（2022）、岩澤ら[6]（2022）、赤木ら[7]（2013）に掲載されている事例を参考にした。事例は、実際に保育施設で多々みられる内容を選択している。選択した事例は、アンケートでは、内容を５つのカテゴリーに分類している（表２）。この分類は、特に岩澤らの分類を参考にした。分類の仕方は、行動と身体という個人の様子、生活や言語を含めた他者との関係でカテゴリーわけしているからである。これは、順次性を追って具体的な演習課題を設定する場合に活用大である。また、授業で取り上げるテーマの追究という、本研究の目的にも合致していると考えたからである。

分析は、設定したカテゴリー内のどんな事例を優先的に取り上げるかを調べるために行った。各カテゴリー内の事例に点数の重み付けを行うことで分析することとした。

５つのカテゴリーは、以下のようなものである。

１）カテゴリーＡ　〈個人行動面〉
２）カテゴリーＢ　〈身体特性面〉
３）カテゴリーＣ　〈人間関係面〉
４）カテゴリーＤ　〈基本的生活面〉
５）カテゴリーＥ　〈言葉や会話面〉

各々のカテゴリーごとに、ａ～ｆまでの６つの具体的な行動を例示した。保育者には、授業等で学んでおいたらよいと感じる事例を、カテゴリーごとに「１～６」の順番付けをしてもらう。集計は、「１」を記入した事例は６点、「２」と記入した事例は５点・・・・・・・。「６」と記入した項目は１点となるようにした。この重み付けによって集計した結果を表11に示す。それらの得点が高い事例が、保育者が気になる行動と考える。結果をもとに、保育者が各カテゴリーの６つの事例に、どんな重み付けをしたのか考察する。

１）カテゴリーＡ　〈個人行動面〉

カテゴリーＡは、特定の子どもが行動面について行う、気になる行動を取り上げたものである。気になる行動の事例は、

表10　保育者の対応事例

対応の事例	施設Ａ	施設Ｂ	施設Ｃ	合計
a 思い通りにならないとかんしゃくを起こす・暴れる・叩くの対応・パニック	1	8	7	16
b 言葉が出ない・コミュニケーション等、意思疎通の対応	2	1	5	8
c 毎日同じルーティンの声かけをしても定着しない対応	1	3	3	7
d 次への活動の切り替えができず、固執への対応・ルーティン対応	3	0	3	6
e 自我が強く全体で行動しない等、マイペースな行動に対する対応	1	2	3	6
f 自分の世界観（立ち歩き）で、全体で行動しないことへの対応	2	0	6	8
g 全体への声かけで行動できず、いつも個別での声かけ等の対応	1	4	4	9
h 思うがまま動くこと（窓から飛び出す等、衝動的）への対応	1	1	3	5
i 質問した内容と違う反応が帰ってくる・目が合わない	1	1	0	2
j 楽しさ等で興奮すると大声、激しい動きや奇声やクルクル回る	1	1	3	5
k 大きな音で耳を塞ぐ等、刺激に敏感	1	0	1	2
l 担任が一人で対応しなければならない状況（各種の個別対応と全体対応）	1	3	1	5
m 心身の発達（理解力）の遅れ	1	0	0	1
n 指導法の選択の悩み・準備対応	0	1	5	6
o 保育者同士の言情報共有や使用の言葉（名称）の統一への対応	1	0	0	1
p 身体的な補助支援（車椅子等）に対する対応	2	0	0	2
q 情緒不安定な子どもへの対応	1	0	0	1
事例合計	21	25	44	90

a　集中力が続かなく、興味を無くすとその場からいなくなる。
b　好きなことに集中すると、行動の切り替えができなく固執する。
c　何度も同じ質問をする。
d　１日のスケジュールが変わると、混乱してパニックになる。
e　性器をいじっている。
f　整列ができない。じっとしていない。

である。カテゴリーＡの得点割合を、図４に示す。

図４は、保育者が記入した割合をグラフで表わすしたものである。事例ａ・ｂ・ｄが総点の20％前後の得点となっている。事例ａと事例ｂは、子どもの興味の集中と拡散に関する内容である。事例ａと事例ｂ の内容に関する行動は、保育者の指導・保育の中で気になる子であり、保育者の困りの気持ちを抱かせる内容になっている。例えば保育者が、計画に基づいた日常の保育活動を行う際、子どもが教室や保育室からいなくなることは、安心安全の観点からいっても問題である。また、順次性のある活動を行っている場合、子どもの固執した行動により活動が停滞したり、その子の体験内容を狭めたりすることに繋がる。また、事例ｄも保育者にとって、直面することがよくある症例である。子ども自身が理解している１日のスケジュール内容を、状況の変化に合わせて柔軟に組み替えることができない。事例ｄの様に子どもがパニックになった時、保育者は、どの様にその状況を捉え、対応していけばよいのかを知っていることは重要なことである。

２）カテゴリーＢ　〈身体特性面〉

カテゴリーＢは、保育者が子どもの体の動きについて抱く違和感を、気になるとして捉える内容になっている。気になる行動の事例は、

a　よくものを落としたり、こぼしたりする。
b　リズムとび、スキップができない。
c　姿勢が悪く、いつもだらーっとしている。
d　体を良くぶつけたり、ケガが多い。
e　おもらしをする。
f　ひとりでくるくるまわったり、反復行動をしたりを繰り返す。

である。カテゴリーＢの得点割合を、図５に示す。

カテゴリーＢでは、事例ｃ・ｄ・ｆの得点が高くなっており、それぞれ20％程である。事例ｃと事例ｄは、子どもの姿勢の安定や集中力、または注意力の問題として取り上げることができる。天野ら（2021）は、幼稚園児に対する保護者の姿勢についてアンケート調査を行っている[8)]。アンケートのまとめとして、以下のように記述している。

表11　事例ごとの得点

カテゴリー	事例ａ	事例ｂ	事例ｃ	事例ｄ	事例ｅ	事例ｆ	総点
カテゴリーA	217	218	99	190	101	162	987
カテゴリーB	159	120	210	202	97	199	987
カテゴリーC	206	79	156	198	111	237	987
カテゴリーD	154	236	118	167	134	178	987
カテゴリーE	158	194	147	147	124	217	987

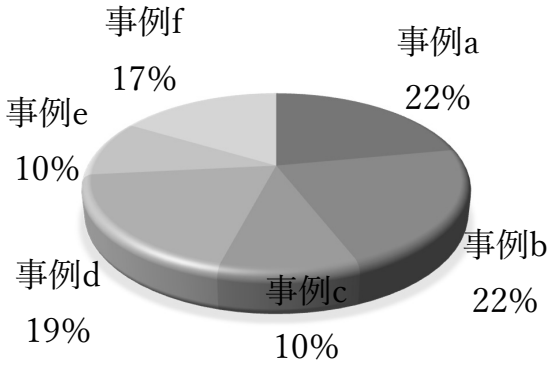

図４　カテゴリーＡの割合

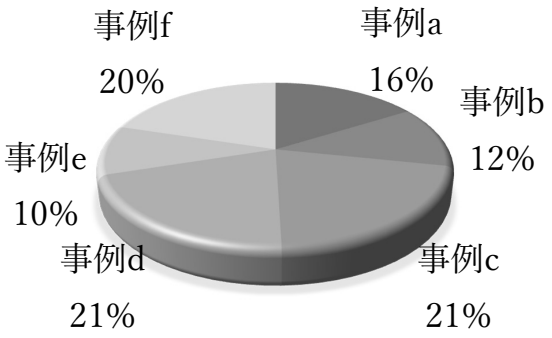

図５　カテゴリーＢの割合

1．幼稚園の保護者は姿勢への関心が高い
2．姿勢教育の開始時期は幼稚園からが適切と考えている
3．姿勢教育は家庭と幼稚園の両方で行うのがよい
4．子どもの姿勢の気になる部分は背骨（猫背）だが、足への関心も高い
5．食事中の姿勢の悪さが気になる
6．子どもの姿勢のチェック体制の強化が望まれる

この結果は、保護者と子育てを共有する保育者の意識にも影響を与えていると考える。したがって、気になる子どもの指導・保育について考える授業で、子どもの姿勢、さらにはケガ等の発生や予防について考えることは必要である。

事例ｆは、保育者や周囲のものにとっては、奇異な行動である。現場の保育者は、子どもの予測しがたい行動について、気を配ることを求められている。しかし、行動に至るまでの原因や文脈、または子どもなりの思いが必ず存在するはずである。学生が、目の前の事実だけにとらわれず、指導や保育にこの事例からの学びを生かすことも重要である。

３）カテゴリーＣ　〈人間関係面〉

カテゴリーＣは、個と集団の関係を上手く築き上げられない子どもの事例に、特化したものである。事例は、集団生活のルールと個の特性に起因するものが中心である。事例としたのは、

ａ　おもちゃの貸し借りができない、トラブルになる。
ｂ　特定の友達としか遊べない。
ｃ　列・順番を守ることができない。
ｄ　ルールを決めても理解できず、よくトラブルになる。
ｅ　一人遊びが主で、友達と遊ぶことをしない。
ｆ　友達の嫌がることを繰り返したり、しつこくしたりする。

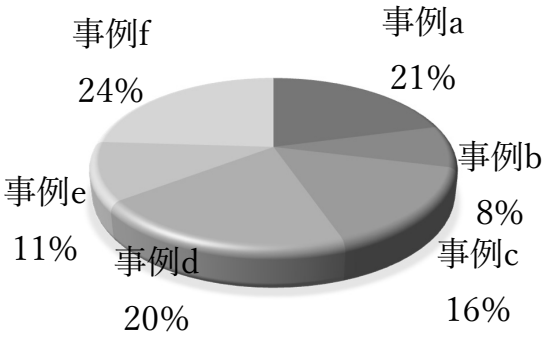

図６　カテゴリーＣの割合

である。カテゴリーＣの得点割合を、図６に示す。

カテゴリーＣで多く選択されているのが、事例ａ・ｄ・ｆの３つである。カテゴリーＣの６つの事例は、どこの保育施設においても、頻繁にみられる事例である。しかし、保育者が気になる子どもの様子として、高い得点を付けるには理由があるはずである。その理由は、保育者の記述である表10の保育者の対応事例から考えられるので、後述したい。

保育者が高得点を付けている事例ａ・ｄ・ｆの中で、24%の割合の得点を得ているのが、事例ｆ「友達の嫌がることを繰り返したり、しつこくしたりする。」がある。この事例は、保育者が何度となく、そして継続的に対象児に関わっていかなければならない問題の一つである。一回の指導や関わりで、問題の解決に至り、状況が緩和されることは珍しい。保育者にとっては、指導や保育にエネルギーをかけることになり、悩みも多くなる。それだけに、この問題について、学びを深めて欲しいという保育者の願いが推測される。事例ａ・ｄも同様に得点が高い。事例ａ・ｄは、事例ｆと異なり、決められたルールを守ったり、ルールに沿った行動ができなかったりすることに起因している。ここには二つの問題が隠されている。その一つは、ルールは分かっているが自己中心的感情を抑えきれずにトラブルになるパターンがある。もう一つは、集団で決めたルールを理解しているようであるが、実はルール自体の理解ができていないことが考えられる。保育者は、子ども一人一人や集団の様子、および子どもがルールを理解して行動しているか、丁寧に見取っていくことが大切になる。

この事例が高得点となった理由を考えるためにも、アンケートの設問Ｑ４で、人間関係に類する自由記述（支援内容・試み）を掲載する。

○わかりやすい言葉で「嫌だよ」と伝えたり、絵カードを見せることで、理解して聞き入る姿がある。保育者が慌てているとそれが伝わってしまうのか上手く伝わらない。
○できるだけその子の気持ちにより添い、思いを十分に受け止めるよう心がけた。その中でも歩み寄れる部分、話をして納得してもらいたいところを見極めながら、周りの子どもたちとの関わりやその気持ちを受け止めた上での落ち着きをもてるよう配慮した。
○本人の気持ちをきいて、寄り添うところは寄り添う、頑張ってもらいたいときは頑張ってもらう。様子を見て、かけひき。
○相手を傷つけるようなことをした時やルールの伝え方に悩むことが多い。不快（怒られた）と言うことだけが残り、伝えたいことが伝わらず・・・ということがたくさんある。伝えたいことをしぼり、その他の事はできるだけ肯定的に受け止める努力をしている。

○相手の気持ちを理解するにも難しかったりしましたので、なるべくズレないように寄り添っていたり、視覚的なものを用いたりと工夫しながら、支援児が他者に認めてもらえるように、そして本人が気持ちよく過ごせるように試みました。
○なるべく、その子のもつ楽しくなりすぎたり世界と現実をつなげてあげられるような言葉がけ、いつのまにかみんなと一緒になればと思って保育をしていた。
○同じことができないことが多いですが、同じことを体験していけるように補助したり、工夫してきました。
○その子の好きなあそびをみつける。⇒その子の興味のあるあそびを、友達が興味を持って一緒に遊べるようになった。
○（前略）同じ動きはできなかったので、同じ空間で本人がいたいだけいて、クラスの中で過ごす経験を大切にした。
○無理に入れ込もうとするのではなく、集団の枠を大きく考えて、「集団にどうしたら入れるか」と、考えるのを止め、その子が入りやすい集団を教師が考えて作って行くようにしました。
（下線は筆者による）

記述内容をみてみると、保育者の対象児への関わりには一定の方向性がある。それは、対象児の気持ちを受け入れる・寄り添うということである。そして次に対象児が受け入れやすい指導内容や保育内容を挿入していくことである（下線部）。「わかりやすい言葉かけ」、「伝えたい内容の精選」、「絵カード」などの視覚効果の導入など、保育者は対象児の特性を考慮した工夫を施している。「かけひき」という言葉もあるほど、対応は多岐複雑である。これらの保育者の思いが事例ａ・ｄ・ｆの得点を押し上げている要因と考える。したがって、個と集団の関わりに関する授業の重要性がより鮮明となった。

４）カテゴリーＤ　〈基本的生活面〉

カテゴリーＤは、子どもの個人的特性に関する内容である。事例としたのは、

ａ　手足の汚れを気にする。

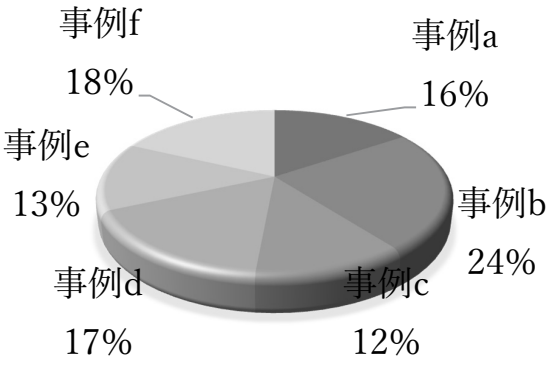

図７　カテゴリーDの割合

ｂ　自分の思いで行動し、他のことが目に入らない。
ｃ　制作物・作品を完成できず、いつも途中半端で終わる。
ｄ　保育者が代るとパニックになる。
ｅ　発表会等練習や本番の活動に参加しない・消極的である。
ｆ　身支度に、極端に時間がかかってしまう。

である。カテゴリーＤの得点割合を、図７に示す。

カテゴリーＤで多く選択されているのは、事例ｂ・ｆである。このカテゴリーは保育者が、子ども個人の基本的生活の気になる事例について、重み付けをしたものである。事例ｂは、得点の割合が他と比較して24％と高い。事例ｂの内容は、子どもが集中したり何かを欲したりした場合、自己中心的行動に出てしまうことを表している。そうした場合、ほとんどが他の子どもや保育者との間に葛藤が生じてくる。この内容は、人間関係について集計を行った、カテゴリーＣの内容に繋がる。また、一見すると事例ｆは、園生活における子ども個人の適応の問題にみえる。しかし、多くの園児が生活を共有する園生活では、個の対応に保育者が手をかけることは、集団としての保育活動の停滞に繋がることもある。これらの事例に関しても、事前に状況や対応についての知識や技能の習得が求められている。

５）カテゴリーＥ　〈言葉や会話面〉

最後の設問に言葉に関する気になる事例について取り上げた。幼稚園教育要領[1]・保育所保育指針[9]・幼保連携型認定こども園教育・保育要領[10]の領域「言葉」に関する目標は、以下のように述べられている。

○経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

である。３つの形態の保育施設の領域の目標は、同じである。表記の目標を達成するために、様々な内容が明記されている。幼稚園教育要領１）の言葉の「２内容」の中に、「生活の中で必要な言葉が分かり，使う」がある。

また、保育所保育指針[9]の「言葉（イ）内容」の中に、「② 生活に必要な簡単な言葉に気付き、聞き分ける。」がある。幼保連携型認定こども園教育・保育要領[10]においても同様の記述がある。取り上げた事例は、特にその中で、他者に対する意識と意思表示を言葉で行う園生活に大きく関わる内容を採用してある。例としたのは、

ａ　話す声の大きさ調整（大きい・小さい）ができな

い。

b　質問の答えがなく、全く違う内容のことを答える。

c　オウム返しや繰り返しが多い。

d　相手に構わず、自分のことを一人で話続ける。

e　緘黙・部分緘黙がみられる。

f　相手に構わず、汚い言葉を使ったり、時には暴言をはいたりする。

カテゴリーＥの割合を、図８に示す。カテゴリーＥでは、事例ｅの緘黙・部分緘黙に関する事例が少ない。しかし保育者は、他の事例について概ね平均した重み付けを行っている。言語や会話面でこの事例が気になる理由は、身体（感覚器）的な発達や知的な発達、または、情緒面の発達からなど理由は様々であろう。事例ｆがやや割合が多いが、保育者はこれらの事例を、保育の現場で概ね均等に発生している事例と考えている。したがって、保育者の重み付けに大きな差が出なかったものと考えられる。

２－５．カテゴリーへの重み付け

前述したように、アンケート調査では保育者に、５つのカテゴリー内に例示した具体的状況について、内容の重み付けを行ってもらった。授業では、これらの結果に留意し、優先度を付けて講義・演習のテーマ設定をすることが可能である。

さらにアンケート調査では、最後に保育者に敢えて５つのカテゴリーの重み付けをしてもらった。方法は、各事例への重み付けと同様である。この設問は、保育者の切実な困りの感情に通じるものとして設定した。保育者は子どもが園生活に適応し、楽しく過ごせることをいつも願っている。しかし、保育者が配慮しても、様々な理由で園生活に十分適応できない子どもが目の前にいる。保育者にとって気になる意識の強いカテゴリーが、即ち、学生に講義や演習で学んで欲しい問題にも繋がる。集計結果を、表12と図９に示す。

保育者に、５つのカテゴリーについて重み付をしてもらった結果は、以下の通りである。集計結果では、カテゴリーごとの重み付けは、２極化したものとなった。極端に低い得点のものは見当たらないが、明らかに２つのカテゴリーの得点が高い。カテゴリーＡの個人行動に関わるものとカテゴリーＣの人間関係に関わるものである。

この２つのカテゴリーは、子ども個人の特性（個）と他の子どもとの関係性（集団）の違いを表わしている。しかし、保育者にとっては、日常の教育・保育活動の中で、この２つのカテゴリーが関連している内容であることが、設問Ｑ４の自由記述からも見て取れる。記述内容には、状況に合わせて、何らかの手立てが集団を意識して施されているものも多い（自由記述下線部）。カテゴリーＡ〈個人行動〉の様な気になる子どもの行動が、工夫や配慮の必要性を生じさせる起因になっている。したがって授業では、個の特性から発生する行動を、集団との関係性まで関連・発展させて取り扱うことが必要である。

Ⅳ．まとめ

本研究は大学での授業改善を目的として、２種類のアンケート（学生対象・保育者対象）を行った。学生へのアンケートは、特別な支援や気になる子への関わりについて尋ね、その不安感について回答してもらった。回答は、自由記述を主としておこなった。その回答内容を、記述内容ごとに分類してカウントした。保

表12　保育者が選んだ重み付け（得点）

カテゴリー	得点
Ａ〈個人行動〉	240
Ｂ〈身体特性〉	152
Ｃ〈人間関係〉	247
Ｄ〈基本的生活〉	190
Ｅ〈言葉や会話〉	171

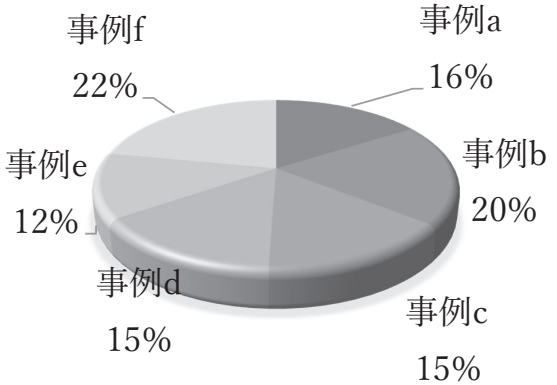

図８　カテゴリーEの割合

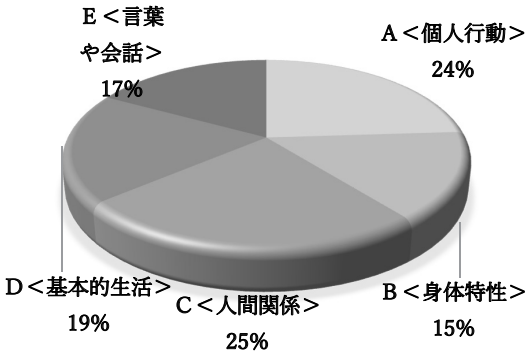

図９　保育者が選んだ重み付け（割合）

育者へのアンケートは、自由記述と共に気になる子どもの事例を呈示して分析した。事例は、保育現場で散見する気になる子どもの言動を呈示し、保育者はカテゴリーごとの重み付けを行った。

その結果、学生は、個人の特性に関する内容と個と集団の関係についての内容に不安を抱いている回答をした。

また保育者は、気になる子どもへの対応に関する自由記述を行い、さらに子どもの行動事例に、重み付けを行った。その結果、自由記述では、保育者は、個人の特性に関する内容、個と集団の関係性に関する内容に多くの記述があった。また、事例に関する重み付けでは、保育者が気になる子どもの行動で、カテゴリー内での重み付けの傾向が分かった。

今回の研究では、大学生と現場の保育者にアンケートを行って、気になる子の関わりについて、不安や願いを尋ねた。特に保育者には幾つかの事例を呈示し、学生が身に付けておいたらよいと思われるものを尋ねた。事例は、どれも実際に保育者が遭遇する子どもの実態であり、学生が知っておくべき内容である。

本調査は、本学授業内容の活性化を目指して行ったものである。したがって、今回のアンケート調査は、サンプル数や対象が限定されているのは否めない。今後はさらに質問内容や事例等を拡大する必要がある。また、アンケート内容の精選および分析方法の高質化により、精度を高める必要がある。それら研究結果を授業に取り入れることにより、学生が保育者となったとき、気になる子どもへの対応に自信がもてると考える。

謝　辞

本研究を実施するに当たり、羽陽学園短期大学附属たかだま幼稚園園長丹野宣秀先生、学校法人星置学園ほしおきガーデン星の子幼稚園園長上村毅先生、社会福祉法人札幌みどり福祉会前田中央保育園園長渡邉慎司先生には、アンケートの実施および、そのとりまとめまでして頂きました。ここに改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

1）文部科学省：「幼稚園教育要領」〈平成29年告示〉，フレーベル館，2017
2）守巧・酒井幸子・前田康弘・小笠原明子：「幼稚園における気になる子に対する新任教諭による援助の実態」，東京家政大学研究紀要　1　人文社会学56，2016，pp.115-121
3）矢野洋子・安東綾子：「学生の保育実習への不安に関する検討Ⅱ－気になる子どもへの不安に対応できる授業の構築－」，九州女子大学紀要，第58巻２号，2021，pp.99-110
4）小平雅基・中村圭子監修：「気になる子のために保育者ができる特別支援」，Gakken，2016（第２刷），pp.26-77
5）久保山茂樹編著・札幌市教育委員会幼児教育センター監修・札幌市立幼稚園の先生方協力：「気になる子の理解と育ち　知恵とワザ」－保育の中のヒント集－，風鳴舎，2022，pp.24-27，pp.30-53，pp.58-73，pp.78-81，pp.100-104，pp.116-119
6）清瀬市子ども発達支援・交流センター　とことこ　岩澤寿美子・西村和久監修：「気になる子の保育サポート74実例」，新星出版社，2022，pp.46-47，pp.54-55，pp.56-57，pp.64-65，pp.66-67，pp.70-71，pp.74-75，pp.96-99，pp.104-105，pp.110-115，pp.120-125，pp.130-133，pp.134-135，pp.142-143，pp.152-153，pp.168-169，pp.170-171，pp.184-185，pp.186-189，pp.190-191，pp.198-199
7）赤木和重・岡村由紀子編著：『「気になる子」と言わない保育－こんなときどうする？－考え方と手立て－，ひとなる書房，2013，pp.12-31，pp.44-51，pp.60-63
8）天野勝弘・渡邊奈々・小林咲里亜・水原佐和子・浅野幹也・三浦孝仁：「幼児期の保護者に対する子どもの姿勢についてのアンケート調査」，環太平洋大学研究紀要，18巻，2021，pp.187-195
9）厚生労働省：「保育所保育指針」〈平成29年告示〉，フレーベル館，2017
10）内閣府・文部科学省・厚生労働省：「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」，フレーベル館，2017